

# 所 沢 市 平和推進事業のまとめ

平成 2 8 年度

経営企画部企画総務課

## 所沢市平和都市宣言

武蔵野の緑豊かな自然のなかで、やすらぎに満ち、健康で生き生きとした日々を送ることが、私たち市民共通の願いです。

私たちは、国是の非核三原則を厳守し、戦争という過ちを繰り返さないことを願うとともに、限りある資源を大切にし、かけがえのない地球環境を守り、平和な世界が確立されることを強く望みます。

所沢市民は、基地全面返還を求め、未来に向かって平和な社会を築くことを誓い、ここに平和都市を宣言します。

平成2年6月22日議決、同年7月1日告示

## 目 次

広島平和記念式典参加事業	1
所沢市平和大使「広島平和記念式典参加」感想文	5
所沢市平和を語る会（語り部派遣事業）	18
所沢市平和祈念資料展	23
資料編	25
所沢市平和推進事業の歩み	26
広島市旧庁舎被爆敷石について	27



広島平和記念公園・原爆死没者慰霊碑

# 広島平和記念式典参加事業



原爆ドーム  
(広島平和記念公園内)

## 《広島平和記念式典参加事業概要》

【 期間 】平成28年8月5日（金）～ 6日（土）

【参加者】市内在住の大学生3名、高校生1名、中学生2名  
市議会代表2名、事務局2名  
計10名

【 概要 】毎年8月6日に執り行われる「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式（広島平和記念式典）」に参加し、原爆死没者を追悼し、世界の恒久平和を願うものです。

さらに、広島市内の被爆施設や資料館への見学も行い、戦争の悲惨さや平和の尊さを実感する機会となっています。

市民代表の方が一緒に参加される現在の形になって今回で26回目となります。また、平成19年度からは、市民代表者の対象者を中学生から大学生までの方としています。

この事業は、戦後70年が経過し、唯一の被爆国であることを風化させないためにも、将来を担う若い世代の方が被爆地である広島に赴いて式典に参加し、実際に見て触れることで、原爆死没者への追悼や戦争の悲惨さ、平和の尊さを再認識していただくためのものです。

行程

8月5日(金)

所沢市平和大使(市民代表)6名と市議会議員を含む参加者一行は、所沢駅で出発式を行い、新幹線にて広島へと向かった。

広島市到着後、平和大使らは、宿泊地近くの袋町小学校平和資料館を見学した。その後、平和記念公園を訪れ、原爆慰霊碑に市及び市議会の代表として生花を捧げ、原爆死没者の冥福を祈った。そして、平和記念資料館、原爆の子の像、原爆ドーム、被爆爆心地(島外科)の見学を実施し、初日の行程を終えた。

- 6 : 3 0 所沢駅集合
- 1 2 : 3 1 広島駅到着(新幹線にて)
- 1 4 : 2 5 平和記念公園へ  
(献花、平和記念資料館や原爆ドーム等の見学)

8月6日(土)

式典当日は、早朝に宿泊場所を出発し、会場である平和記念公園に到着。

午前8時から「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」が開式され、原爆死没者の名簿の奉納、代表による献花の後、原爆投下時刻の午前8時15分、平和の鐘を合図に参列者全員で黙とうを行った。

次に広島市長による平和宣言、こども代表の誓いのことばと続き、安倍首相、国際連合事務総長などから挨拶があった。最後に会場では「ひろしま平和の歌」を合唱し、午前8時45分に閉会となった。

式典終了後、休憩をとり、帰路についた。

- 7 : 0 5 平和記念公園へ
- 8 : 0 0 広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式開式
- 1 2 : 3 5 広島駅発(新幹線にて)
- 1 7 : 5 3 所沢駅着(解散)

なお、5ページから平和大使の皆さんの感想文を掲載させていただきました。





平和大使委嘱式



慰霊碑に献花



原爆ドームの前にて



「原爆の子の像」にて千羽鶴の奉納



式典の様子

## 平和大使感想文

(順不同)

「戦争や平和について学んだこと」

中学1年 荻原 純伶

教科書にも、原爆ドームや平和記念式典の様子などがのっているけど、もっと戦争についてくわしく知り、戦争や平和の尊さを自分の目で見て感じたいと思い、この事業に参加しました。抽選で選ばれたときはすごくうれしいのと、所沢平和大使として戦争などをみんなに伝えていかななくてはならないという責任感も感じました。

広島へ行き、袋町小学校平和資料館、平和記念資料館、原爆ドームなどを見学しているうちに、少しずつですが、戦争の面影が分かってきたような気がします。

一番心に残ったのが袋町小学校平和資料館と平和記念資料館です。袋町小学校では、壁面に書かれた、人の消息や伝言、メッセージなどが残されていたり、日本各地から平和になるための願いをこめて、数多くの千羽鶴がかざっており、私は強く胸を打たれ、みんなの熱い思いをしっかりと心に刻もうと思います。平和記念資料館では、被爆した人々の遺品や熱線によってボロボロになった服、原子爆弾によって体全体にひどいやけどをした人の写真などが展示していて、1番忘れられないのが、お弁当箱を抱きながら、亡くなってしまった方がいたことです。お弁当の中はまっ黒にこげてしまい、とても大切だったお弁当箱を抱きながら亡くなってしまおうのと思うと悲しくなり涙があふれそうになりました。あと、溶けたかわらやガラスなどをみて、原爆のおそろしさを知りました。

6日の2日目に参加した、平和記念式典では、多くの方が参加していましたが、中でも、外国人の方もたくさんいたので驚きました。平和を考えている人は日本だけではなく世界中でもいるんだなと思った。子供代表の言葉で、「私たちには、被爆者から託された声を伝える責任がある。」というのを聞いて、大きく心をゆり動かされました。被爆者の思いや、戦争のことを聞くことができなくなってしまふ日がもう何年かに近づいてきています。そのために、私は、被爆者の願いを受けとめ、戦争のことをみんなに伝えていかなければならないと実感しました。他にも、広島市長さんや、安倍総理大臣さんなどの言葉を聞き、自分も平和について考え、「戦争は二度としてはいけない」と改めて思うのでした。

今回、広島市平和記念式典に参加して、教科書にのっている平和式典の様子



や戦争についての説明より、広島へ行って、自分の目で見ることが、勉強になり、きちょうな経験になりました。戦争の様子など少ししか分からなかった自分が、帰ってきたときにはびっくりするくらい母にたくさん戦争のことを話していました。戦争を経験した方たちはごく少人になってしまい、戦争のことが聞けなくなってしまうけど、自分たちで、戦争を知り、平和を次の世代へとつなげていかなくてはならないと思いました。これからも私は「平和」と「戦争」というのを心に刻み、広島へ行って学んだことはずっと忘れないと思います。この事業に参加させていただき、とてもありがたく思います。いい経験になりました。

「広島での2日間を通して」

大学3年 小幡 珠里

「8月6日を広島で、平和大使として過ごす意味を感じてきてほしい。」事業に参加する前に市長から言われた印象的な言葉です。今回、私は所沢市の平和大使として人生で初めて広島を訪れました。学生時代に行くべきと沢山の人々に言われつつも、広島を訪れるはずだった高校の研修旅行は留学でいけず、大学生のうちには絶対行きたい。。そんな特別な思い入れもあって、袋町小学校や原爆ドーム、原爆の子の像、平和記念資料館、爆心地、そして式典への参加...実際に訪れてみて、様々な気持ちに触れた、感じた、本当に濃い2日間でした。原子爆弾が投下されて、71年。現代を生きていると、関わらなければ確かに「過去の出来事」として『記録』に残すことができるかもしれません。でもそれを忘れさせない爪痕が、人々の思いが、『記憶』として広島にはしっかり存在していました。

2日間の中で、一番印象に残っているのはやはり平和記念式典でした。振り返ってみると、毎年テレビを通して見る式典は、何となく自分とは別の世界な気がして、教科書やドラマでしか見たことのない「悲惨な出来事」を、表面的に思い出すだけで、黙祷も目を閉じているだけの1分間だった気がします。しかし被爆の現実を突きつけられた後に実際に参加した式典での黙祷を捧げる1分間は、とても長く、鳴り響く平和の鐘は心にひとつひとつ押し掛かってくる重さがありました。そして今でも忘れられないのが「平和の誓い」をしたことも代表2人の言葉です。「人の焼けるにおいがした」「ある者は、肌が溶けて見えなかった」という語り部の方の印象的な表現から始まる誓い。今まで知らなかった自分に対する責任の重さと、熱い信念を感じられる声が、心に突き刺さる初めての感覚を覚えました。

もう一つ印象的だったのは、爆心地から460mしか離れていない場所にあった「袋町小学校」です。唯一鉄筋コンクリート造りだった一部を残して、救護所として被爆直後から沢山の沢山人々を救い、同時に命が沢山尽きた場所でもあり、今は一部が保存されて資料館になっています。被爆者の消息を知らせる伝言が壁に記されていて、色々な人々の思いの託しに胸が締め付けられました。「これでまた再会できたのか」「どんな思いで書き綴ったんだろう」「書いてあるかもわからない安否情報を探してどれだけ多くの壁をまわったんだろう」と語り部の方の話の聞きながら思いを巡らせていました。原爆投下による熱射、爆風、光、放射線。数値でしか知らなかったことが、現地の保存されている証や思いが溢れる体験を見聞きすることで感じる角度の幅が広がりました。

そして平和祈年事業の後に紹介され、8月19日に行われた語り部事業にも参加することができました。式典に参加したからこそ感じることもあり、終った

時は心にどっしり押し掛かるような思いを抱えて帰りました。語り部のお二人のお話、そして思いだすのも辛いことを心に込めて語る姿を見て、本や資料ではない、声で聞くことの大切さを感じ、より多くの人に参加すべき会だと実感しました。お1人ずつ1時間立ったまま、私たちひとりひとりに言葉を紡ぐように大切に、でも迫力をなくさないように、少しでも経験をそのまま想像できるように、身体を震わせながらお話し下さいました。そのなかで印象的だったのは、いまでこそ「原爆」、そして原爆の威力や被爆の症状等は知られるようになってきたものの、当時は、「ピカ、ドーン」「爆風」「目の前真っ白」「ガラス・血だらけ」というぱっと浮かぶ記憶しかなかったこと、一瞬で命を奪われた家族や、障害を負った人々を目の前にしても誰に怒りをぶつけていいのか、という戸惑いのお話でした。またそれと同時に勇気ある先生のお話や、疎開の種類が多さ、佐々木禎子さんの鶴をアリゾナの記念館に置いてもらうことになった日本・米国双方の祖先の努力等、まだまだ知らない世界をお聞きしました。「正直思いだしたくない過去を話すのは辛い、でもいつまで自分の思いを伝え続けることができるかわからない。だから聴きたいと足を運んでくれた一人一人に向けて全身全霊をかけて、思いを伝える。命が尽きてしまうまで、ぎりぎりまで、元気に生きて、若い世代に語り続けて行きたい。」とこれは使命だとおっしゃってました。それと同時に、「あなたたちの世代にかかっている。」そう言われました。体験した人々の思いを直接聴けるぎりぎり最後だとも言われる現代の若者の中でも、私たちは自分で考えることができる年齢だからこそ、「仕方ない」では済まされない世代だという言葉が響きました。

今年春に現職の大統領として初めて広島を訪れ、メッセージを世界に発信したオバマ大統領。彼の訴えはきっと世界に大きなインパクトを残しました。そして各国首脳・外相にも訪問を呼びかけたこと、歴史の中でみると凄く意義のあることだと思います。でもそれが人々をどれだけ動かせるか、世界がまとまっていくか、そしてこれからの世代がいかに伝え続けて行くか、それは私たちのこれからの姿勢に左右されます。現在、私は大学のゼミで紛争解決学を勉強しています。しかし、今回、文献とか机上での議論だけしかしてないのにそんな名ばかりなこと言ってた未熟さを改めて痛感しました。まだ何も知らない。知ろうとする努力が足りない。そんな自分に喝を入れつつ、実際に訪れて思いに少しでも触れる、そして考える。それを続けていきたいです。

今回の事業に参加したあとに、この経験を周りの人たちに伝えたいと思い、文章を書いて写真と共にシェアしました。そして沢山の人に「知らなかった」「広島を訪れなきゃと思った」「もう一度行きたい」という声をもらいました。きっと考えている人は沢山いるけど、それを話し合う相手や空間とは得難い機会でもあります。より多くの人々の思いが集まればきっと力になる、そうも思えた経験でした。最後に、平和大使として一緒に広島を訪れた他5人の学生と共に

に広島に行けたこと、貴重な体験でした。事業に関わられた基地対策室の方々はじめ多くの方々に感謝すると共に、今後もこの事業を通して沢山の人が平和への考えを深められることを願っております。本当にありがとうございました。

「折り鶴に平和への願いを託して」

大学3年 小暮 彩紀子

世界で初めて広島に原子爆弾が投下されてから71年後、5月に原爆を投下した米国の現職大統領として初めてオバマ大統領が広島を訪問したことで、平和への気運が高まり、歴史的にも大きな転換期となった今年、私は広島平和記念式典に参加してきました。

8月6日、平和記念式典の開始を待つ間、しおりに挟んであった折り紙で鶴を折りました。折りながら前日に見学した袋町小学校平和資料館、広島平和記念資料館を見たときに感じた様々なことが思いだされました。

焼け焦げて血のシミのついた衣服が、私に肌の焼ける痛みを想像させたこと。私が人生で出会った人のすべてを足しても足りないほど膨大な数を示す「原爆死没者数」は、家族、友人、町の人、近所の人など、自分の周りにいた身近な人を一瞬で失う事実を突きつけてきたこと。人が腰かけていた部分だけが黒い影のように残った「人影の石」は、原爆が投下された時、確かにここに腰かけていた人がいたのだという生々しい現実を物語っていたこと。真っ黒にすすけたコンクリートの壁に記された消息を知らせる「伝言」は、安否の分からない家族や知人への再会を願い、祈りながら伝言を残す当時の人の思いに胸の痛みを感じたこと。展示品の一つ一つには、人々の痛み、苦しみ、悲しみがこもっており、それを見る私たちに強いメッセージを発信しているように感じたこと。

手元の鶴が完成に近づくにつれて、佐々木禎子さんのことを思い起こしました。禎子さんの折り鶴は、「生きたい」「生きたかった」という強い思いを私に訴えかけてくると同時に、他の展示品とは異なる、平和への気付きを与えてくれるものでした。今、何気なく当たり前のものとして手にしているこの平和な社会や健康な自分は実はとても恵まれていて幸せなのではないか、戦争の悲惨さ、原子爆弾の残虐さを学ぶだけではなく、それらについて知った上で考えることのできる平和の形、自分のこれからを身の振り方があると気付きました。

鶴を折り終えてしばらくしてから、式典が始まり、8時15分に黙祷を捧げました。大きく、長く、深く、心の奥底に鳴り響く平和の鐘の音とともに黙祷を捧げながら、爆風が街を覆い、一瞬にして広島の街を焼き尽くす様子が目に浮かびました。一発の原子爆弾によって亡くなった方が何人いるのか。一生背負わなければいけない傷を負った方が何人いるのか。いったい何人の未来が失われてしまったのか。様々な思いが駆け巡ったのち、黙祷を終えて目を開けると快晴の空の下、平和記念公園の木々が目に入りました。「75年間は草木も生えない」と言われた広島でその秋、新しい芽が息吹いたそうです。広島平和記念式典は、原爆死没者を追悼し、戦争の悲惨さを訴えると同時に、そこには努力



によって街を復興し、平和への思いを発信し続ける人々の「たくましさ」と「つよさ」そしてその思いを受け継ぐ広島の子供の姿がありました。

「もっと、知りたいのです。もっと、伝えたいのです。」

「夢や希望にあふれた未来は、ぼくたち、わたしたち、一人一人が創るのです。」

こども代表の言葉に、「広島だけではない」と強く思いました。

所沢市民の方から託された千羽鶴を納める際、「原爆の子の像」には全国各地から持ち寄られた千羽鶴がたくさん集められていました。中には一羽一羽に平和を願うメッセージを書き留めたものがあり、平和への強い思い、伝えたいという思いが感じられました。日本全国、世界中から鶴に乗って広島に集められた平和への思いは、この広島のを始まりに、私たちのような平和大使を含め、世界中の平和を願う人たちの手で、さらに大きく温かい、祈り、願い、決意として持ち帰られ、伝えられ、広められるのだと感じました。

最後に、今回の事業への参加が決まってから、折に触れて市役所の方に所沢市庁舎の玄関前にある「広島市旧庁舎被爆敷石」の話を知りました。特に米軍基地を有する所沢市だからこそ平和への願いは限りなく大きいのだと感じています。所沢市民を代表して、広島市を訪れ、平和について学ぶ機会を与えていただいたことに感謝しています。実際に広島で8月6日を迎え平和記念式典に参加した今回の経験は、今まで学んできた教科書や本のどの文章、どの写真、何にも代えがたい大切な経験になりました。今まで、これほどまでに平和について考えたことはありませんでした。平和を願う所沢市の一市民として、今回の事業に参加させていただき考え、学び、感じたことを、同世代、次の世代にしっかり伝えていける“平和大使”になることを誓います。

本事業の実施にご尽力くださったすべての皆様に深く御礼申し上げます。

高校1年 田淵 麻衣

私は中学生の時、今でも過酷な戦争を世界中でやっていることを知りました。幼い頃に両親をなくし、それから少年兵として働いている少年や、難民として家族と離ればなれでの生活を余儀なくされた人々の話を聞いて、とてもショックを受けました。私はそれから平和について以前よりも真剣に考えるようになり、今回の広島見学に応募しようと決めました。

私は日本人として、広島や長崎に落とされた原爆のことや、太平洋戦争のことは知っているつもりでした。学校の教科書や図書館の本に書かれていることを私は調べをして覚えていたので、恐ろしいことだとは思っていましたが、単に「恐ろしいこと」としか受け止めていませんでした。本に書かれている文字や数値を私は単に読んでいるだけでした。

私は今回初めて広島を訪れ、初めて原爆ドームや平和記念資料館、袋町小学校を見学しました。そこで爆風に当たって鉄筋がむきだしになったドームや、熱風で燃えてしまった服、また大きく変形してしまった道具などを見ました。それらは全て私の想像をはるかに超えていて、直視するのもためらいたくなるようなものばかりでした。

そこで私は初めて、戦争について知っている「つもり」だったことに気付かされました。教科書や本に載っている言葉は正確に情報を伝えてくれます。しかし、実際は少しも言葉で伝えられる現実などないのです。私は原爆ドームや資料館を見て、強く思いました。

また、資料館の中には被爆者が体験したことや見た光景を自ら描いた絵がいくつも展示されていました。その中の1枚はこんなことが描かれていました。「原爆が落とされて家が爆風で崩れてしまい、娘と母親はその下敷きになってしまいました。かろうじて母親は抜け出すことができましたが、娘はいくら母親が引っ張っても抜け出すことができません。しかも原爆の熱風でいたる所で火災が発生していて、もうすぐ自分の家にも火が移りそうです。原爆投下後の混乱の中では助けも呼ぶことができず、母親は娘を見捨てて逃げるしかありませんでした。」母親はどれだけ後ろ髪を引かれる思いで娘を見捨てて一瞬で焼け野原となった町を逃げたのでしょうか。娘はどれだけ苦しく悲しかったのでしょうか。

また、とある被爆者の話では、こんなことを言っていました。「爆心地に程近い場所で被爆した娘は、全身に大やけどを負いながらやっとのことで家に帰りました。家で待っていた母親は、必死で娘の看病をしますが、娘は次の日に亡くなってしまいます。」母親はどんな気持ちで娘の死を看取ったのでしょうか。

広島に落とされた原爆で、14万人もの方が亡くなりました。しかし私たち

は14万という数字を14万として見てはいけません。1つ1つの死には、上で述べたように悲しい現実があるのです。私たちはそのことをしっかりと理解して、考えなくてはいけません。数値を数値としてとらえてはいけないのです。言葉や数にしてしまうとどうしても正確な事実が分かったような気になってしまいます。しかし実際は、人の苦しみや痛みはそんなことでは表せないのだということを私は初めて学びました。

私たちが見学した袋町小学校は、爆心地から近いものの、なんとか爆風を受けても校舎の一部は残った小学校です。そこにある黒板は、生存者の見つからない家族を探した伝言や、安否を伝えるメッセージでうめつくされていました。そこには、必死で生きようとする当時の人々の思いが込められていた気がします。現代の私たちは、生きられることが当然なほど平和な国に生きています。しかし、これがどれだけ幸せなことかを決して忘れてはいけないと思います。

被爆者の平均寿命は80歳を超え、もう長くは話を聞くことはできません。まずは日本人の一人一人が自分の目で耳で戦争について感じて、自分なりの意見を一人一人持ってほしいと思います。そして、たった一発の爆弾で町が一瞬にして消え、多くの人々の命と幸せを奪った恐ろしさを、私が今度は語り継いでいきたいと思います。

「広島平和記念式典参加事業を振り返って」

中学1年 原田 結依

今回の事業には、広島に行くことに単純に興味を持ち参加しました。参加前の私は、戦争のことをあまり知らず、いい機会なので応募してみようと考えました。しかし、何年迎えても変わることはない、変わってはいけない戦争の憎しみと悲惨さを身体全部で学び、私の認識不足を感じました。それを12歳の私から強く伝えたいと思い言葉に残します。

初めて見た広島は、ビルが立ち並んでいて都会を感じさせました。そこには、戦争の影がないように思えました。しかし、ビルに埋め尽くされたような小さな小学校が立っていました。その小学校は袋町小学校と言います。袋町小学校は原爆によって大きな被害を受け、今は資料館に姿を変えています。校舎は倒壊、全焼し、唯一コンクリート造の西校舎のみ原形をとどめています。壁からは爆風が原因とみられる傷が残り、同時に所狭しと家族、友人への行方を求める伝言が書かれている黒板がありました。生きているのかをきく切実な文章の一つ一つが辛く、心を突き刺しました。

資料館では、目も当てることができないほどの全身火傷の少女の写真や死をさまよう被爆者の再現人形がありました。見たくない気持ちと戦いながら見た人形は、服がボロボロで皮膚が垂れ下がり、肉が見え、血が流れている状態でした。それを見た私の心はかき乱され、ただただ悲しいと思いました。何の関係もなく罪のない人々が一瞬にして死に、人とは思えない姿になってしまった。そこに何の意味があったのだろうか、疑問が募るばかりでした。でも、私たちはそれをより多くの人に伝えなくてはならない。未来へつなぐ重要性をあらためて感じることができました。

また、資料館には数多くの遺品が残されています。原形がわからない遺品を見ると原爆の恐ろしさを改めて感じさせてくれます。普通ではそんな状態にならないだろう物の一つ一つを見ると、原爆の被害の実態を学ぶことができました。また、原爆の放射線による後遺症の方の写真も展示していました。ケロイドで苦痛を虐げられた女性の背中の皮膚は盛り上がり、腫れていました。さらに顔に赤い斑点ができ、苦しんでいる男性の姿もありました。原爆は人を死に追いやるだけでなく、その後の人生にも爪痕を残すことを知り恐くなりました。二度とこのようなことは起こらないでほしいと強く望みます。

この2日間はすごく充実しており、忘れられない時間でした。「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」に広島にいる意味を深く考えることができました。式典では黙祷の一分間がすごく印象的でした。黙祷をしている間、71年前に何があったのか、どうなってしまったのか、考えるだけで辛くなりました。この思いを同学年の人たちに伝えていきたいと思います。

最後にこの事業を立ち上げてくださり、引率して下さった、菅原様、大館様、本当にありがとうございました。これからもこの事業を続けてくださると嬉しいです。原爆がなくなることを心から祈り、終わりとさせていただきます。



「所沢市平和推進事業を終えて」

大学1年 吉田 有希

今回、所沢市の平和大使として初めて広島に行かせていただきました。元々私は歴史が好きで広島に落とされた原子爆弾のことも、知識や数値としては知っていました。しかし、どこか教科書や本の中の世界という感じがしてあまり身近には感じていませんでした。私の知り合いに広島原爆ドームや平和記念資料館を訪れたことがある人がいて話を聞いたことがあり、前々から広島は一度訪れてみたいと思っていました。

広島に着いて一番最初に訪れた袋町小学校では、原子爆弾の爆風や熱によって歪んだ扉や、丸焦げになった太鼓、黒板などが展示されていました。黒板には家族を探す人々のやり取りなどが書かれていて、人々が何を思い、ここでどう過ごしていたのが分かりました。階段を上った所には沢山の千羽鶴や子供が書いたと思われる手紙が置いてあり、ここを訪れた人々の想いが感じられました。前々から訪れてみたいと思っていた平和記念資料館では、被爆した方の皮膚や爪、体に残っていたガラスやケロイド、原子爆弾の熱によって歪んだガラスやコンクリートが溶けて人骨と一緒に固まってしまったものなど、想像以上に当時の様子が生々しく残っている物が展示されていて、とても衝撃的でした。教科書や本の中の写真ではなく、実物を見たことでより一層原爆が落とされた当時の悲惨さが伝わってきました。佐々木禎子さんという二歳で被爆しその後白血病で亡くなった女の子の遺品が展示されている所では、彼女の人生が年表で掲示されていました。被爆したことは彼女にとってはまだ物心もつかないうちのことだったと思うと、胸が押しつぶされるような気持ちになりました。彼女が入院中に折った折鶴は有名ですが、実際に実物を見るのは今回が初めてでした。想像よりも小さくて、とても丁寧に折られていました。その小さく力強い折鶴達からは、禎子さんの「生きたい」という想いが伝わってきました。残念ながら今回は改装中ということで平和記念資料館の東棟は見る事が出来ませんでした。ここで見たものは当時の悲惨さを物語っており、あのきのこ雲の下で何が起こっていたのかを改めて感じる事ができた貴重な時間となりました。

「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式典」は、式典に参加する前に原爆ドームや資料館を訪れたので、より首相や被爆者代表の方のスピーチに聞き入ることができました。今まで式典はテレビでしか見たことがなかったのですが、実際に参加してみると思っていたよりあっという間に終わってしまいました。今年は例年より多くの人で混雑していました。私達以外にも違う市や県から派遣されている学生の団体がいたり、先日アメリカの大統領バラク・オバマ氏が訪れたことで、外国人からの注目度がよりあがったようで、多くの外国人

が訪れていました。一般の来場者の中には席に座ることができず、後ろの方で立って見ている方も大勢いて、改めてこの式の重要さを知りました。

私はずっと広島に訪れてみたいと思っていました。その思いが叶い、原爆ドームと平和記念資料館を訪れることができたところか式典にも参加することができ、とても貴重な体験をさせていただきました。今回の事業で戦争について考え思ったことは、戦争はすれば必ず多くの人々が不幸になるものだと思います。戦争の勝敗は、互いの国の多くの人々の犠牲の上にあるものです。改めて、戦争は起こしてはならないものだと再認識することができました。戦後70年以上が経ち、語り手の方々も高齢になっています。私はこの二日間で学んだことを伝えていきたいと思います。最後に、この事業を企画してくださった方々に深く御礼申し上げます。貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございました。

# 所沢市平和を語る会 （語り部派遣事業）



中島 寿々江さんによる講話の様子



杉本 孝一郎さんによる講話の様子

## 《平和を語る会（語り部派遣事業）実施概要》

### 【 概要 】

被爆体験者・戦争体験者の語り部による講話を市民の方に対して行い、平和の尊さ、命の大切さを訴えます。

市の施設で実施する場合は、市民の方を対象とし、小・中学校への派遣の場合は、児童・生徒を対象とした事業で、平和学習の一環として実施されています。

### 【 実施日 】

平成28年 6月25日 南小学校 6年生  
語り部：杉本 孝一郎さん

7月15日 所沢小学校 6年生  
語り部：杉本 孝一郎さん

8月19日 所沢市役所全員協議会室  
語り部：杉本 孝一郎さん  
中島 寿々江さん

9月 2日 宮前小学校 4年生  
語り部：杉本 孝一郎さん

9月27日 美原小学校 6年生  
語り部：中島 寿々江さん

10月17日 牛沼小学校 6年生  
語り部：中島 寿々江さん

10月26日 小手指小学校 6年生  
語り部：中島 寿々江さん

11月 1日 並木小学校 6年生  
語り部：中島 寿々江さん

11月11日 中央小学校 6年生  
語り部：中島 寿々江さん

- 11月15日 三ヶ島小学校 6年生  
語り部：杉本 孝一郎さん
- 11月16日 北秋津小学校 6年生  
語り部：杉本 孝一郎さん
- 11月18日 若松小学校 6年生  
語り部：杉本 孝一郎さん
- 11月18日 椿峰小学校 6年生  
語り部：中島 寿々江さん
- 11月21日 中富小学校 6年生  
語り部：杉本 孝一郎さん
- 11月29日 伸栄小学校 6年生  
語り部：中島 寿々江さん
- 12月 6日 西富小学校 6年生  
語り部：中島 寿々江さん

合計 16回開催 参加者数 1,314人

年度	実施回数	参加者数
平成20年度	14回	1,197人
平成21年度	12回	988人
平成22年度	12回	1,369人
平成23年度	12回	1,212人
平成24年度	12回	909人
平成25年度	12回	1,143人
平成26年度	12回	1,103人
平成27年度	16回	1,549人
平成28年度	16回	1,314人



## 講師紹介

なかしま すずえ  
中島 寿々江さん

小学校6年生の時、広島市内の爆心地から500mの距離にある家（大手町）に祖母と生活していました。当時、ご両親は仕事で四国に住んでいましたが、四国が空襲の被害を受け、広島に戻ってきていました。

夏休みということで、原爆投下の数日前にたまたまご両親の住む家（3kmほど離れた大洲町）に移っていたため大事には至りませんでした。祖母や多くの親戚の方々を亡くされました。

被爆の体験をもとに当時の広島の様子や被爆当時の状況などから、戦争の悲惨さを訴えます。

今まで、被爆のことを人に話すことは避けていました。本当につらく、悲しい記憶だったものですから。しかし、私も歳を重ね多くの仲間がそうしているように、原爆の恐ろしさ、戦争の悲惨さを次世代に語り継ぐべきではないかと思うようになりました。

多くの方に原爆の話をする事、それが原爆に苦しめられた私の使命なのかもしれません。

語り部の活動を通して、話を聞いてくれた小学生の皆さんから励ましや健康を気遣うお手紙、平和に対する強い思いなどをお寄せいただき、私自身の励みとなり、これからも語り部を続けたいという確かな気持ちになりました。

すぎもと こういちろう  
**杉本 孝一郎さん（市内在住）**

戦争が激しさを増した昭和20年2月、当時13歳のとき、艦載機からの機銃掃射の中、二人の幼い妹の手をとり、雪降る中を裸足で、必死で逃げました。その年の3月10日、一夜にして10万人もの尊い生命が失われた東京大空襲で自宅も焼失してしまいました。

東京大空襲などの話を中心として、現在と当時の様子の違いを伝えながら、平和の尊さと命の大切さを訴えます。

私は、平成17年に広島平和記念式典参加事業に所沢市民の代表として参加したことが、語り部を行うきっかけでした。広島の実相を知り、私にも戦争の悲惨さを語っていく使命があると一念発起したのです。

昭和20年当時、中学1年生だった私は、連日の空襲から逃れるため東京から新潟へ疎開したので、3月10日の東京大空襲からは難を逃れましたが、自宅や友人がどうなっているのか心配でした。

父と上京したときの東京は想像を絶するものでした。上野駅に降りて見た景色は死臭ただよう焼け野原で、戦争孤児といわれる親兄弟を亡くした子どもたちもたくさんいました。食べ物はもちろんのこと何もない時代でした。

何もない時代を生きた者から言わせていただければ、今は本当に恵まれており、全てに感謝して、命を大切に、そして平和が尊いということを実感してほしいと思います。未来は、若い世代の方がつくるものですから...

# 所沢市平和祈念資料展



## 《平和祈念資料展概要》

### 【概要】

市役所及びまちづくりセンターにおいて、市所有の広島・長崎の被爆関係パネル等を展示し、戦争の悲惨さ、平和の尊さの啓発をしました。

### 【開催期間および場所】

平成28年8月 2日～8月15日：市役所1階市民ホール

8月17日～8月22日：山口まちづくりセンター

### 【展示内容】

#### 《所沢市役所市民ホール》

- ・広島・長崎原爆写真パネル
- ・記録図書の閲覧

#### 《その他の施設》

- ・広島・長崎原爆写真パネル

# 資料編

## 所沢市平和推進事業の歩み

- 昭和59年 2月 広島市より原爆の熱線を浴びた広島市旧庁舎内の敷石が所沢市に寄贈される。
- 10月 市長ら一行が広島市を表敬訪問
- 昭和60年 8月 6日 市長・市議会代表らが広島平和記念式典に参列する。
- 11月28日 所沢市広島原爆資料展を開催する。（中央公民館講堂）
- 11月30日 市制35周年記念事業として所沢市平和講演会を開催する。
- 昭和61年 8月 6日 市長・市議会・市代表らが広島平和記念式典に参列する。
- 昭和62年 1月 新庁舎西口広場に広島市旧庁舎内の敷石を設置する。
- 8月 6日 市長・市議会・市代表らと市民代表が広島平和記念式典に参列する。
- 昭和63年 8月 6日 市長・市議会代表らが広島平和記念式典に参列する。
- 平成 元年 8月 6日 助役・市議会代表らが広島平和記念式典に参列する。
- 8月 9日 市長・市議会代表らが長崎平和祈念式典に参列する。
- 平成 2年 7月 1日 所沢市平和都市宣言制定（告示）
- 8月 6日 助役・市議会代表らが広島平和記念式典に参列する。
- 8月 9日 市代表・市議会代表らが長崎平和祈念式典に参列する。
- 平成 3年 7月30日 市庁舎広告塔に懸垂幕を設置する。
- 8月 6日 市民・市議会・市代表らが広島平和記念式典に参列する。
- 10月26日 第12回所沢市民フェスティバルに出展する。
- 平成 9年 11月13日 所沢市平和祈念絵画展「テレジンの子供たちが描いた絵」を開催する。（市庁舎）
- 平成17年 8月25日 所沢市平和祈念資料展を長崎市の全面協力を得て開催する。併せて長崎市からの「語り部」講話会を開催する。
- 平成18年 8月 8日 平和を語る会（語り部派遣事業）を開始する。
- 平成20年 2月28日 平和市長会議に加盟する。
- 平成21年 8月 6日 市長・市議会・市民代表らが広島平和記念式典に参列する。
- 平成22年 8月 9日 市長が長崎平和祈念式典に参列する。

広島平和記念式典への参加については、昭和60年から毎年実施しております。

## 広島市旧庁舎被爆敷石について

昭和59年、当時の所沢市長が広島市との交流を深めていたことから、広島市から旧庁舎のまわりに敷きつめられてあった御影石でできた敷石が当市に恵贈されました。

所沢市では、新たな庁舎建設が始まろうとしていたことから、新しい所沢市庁舎西口玄関前の広場に「広島市旧庁舎被爆敷石」を設置いたしました。

この敷石については、市民からの要望により、毎年8月に献花・献水を行っています。また、この敷石のモニュメントには、以下の内容が刻まれております。

この石は、広島市に原子爆弾が投下されたときに、同市庁舎前の敷石としてあったものを本市の平和への限りない願いと世界平和の祈念のため、とくに広島市の御好意により、昭和59年2月に譲り受けたものです。次の言葉とともに...

No more Hiroshima



# MEMO



所沢市イメージマスコット  
トコロん



## 平成28年度 所沢市平和推進事業のまとめ

平成29年3月発行

編集・発行 所沢市経営企画部

企画総務課基地対策室

所沢市並木一丁目1番地の1

電話 04 - 2998 - 9033

E-mail a9033@city.tokorozawa.lg.jp